

【日本語の作文技術：私的レジюме】

製作：不機嫌亭ゲーム班 進行豹

<レジюме化の はじめに>

本文章は、不機嫌亭ゲーム班 進行豹が、自らの日本語作文能力向上を志して作成した、「本多勝一 著 『日本語の作文技術』」の私的レジюмеです。

本レジюмеは 【『日本語の作文技術』を二週間かけて読む】という、私的企画として、2009/10/17 - 2009/11/03 にかけて製作されました。

上記のような成り立ちのため、本レジюмеには以下のような特徴があります。

- 1: 本レジюме中の例文は、進行豹が自らの理解を深めることを目的に試作したものであり、原著中にある例文とは一致しない。
- 2: レジюме化にあたっては原著を正確に引用・圧縮することよりも、“進行豹にとっての解かりやすさ・読み返しやすさ”を優先している。よって 進行豹以外の人間にとっては、「原著に書かれている趣旨が、全く異なって読みとられる」危険性が高い。
- 3: 日によって、進行豹のコンディションが良かったり悪かったりする。

—ですので本レジюмеは、本レジюме単独での使用に耐えるものではないかと存じます。

出来ることなら、『日本語の作文技術』の原著読解にあわせての補助資料として、本レジюмеをお役立ていただけますようお願い申し上げ、レジюме化にあたってのご挨拶の結びとさせていただきます。

(2009/11/08 不機嫌亭ゲーム班 <http://hexaquarker.com/> 進行豹)

[一日目:09/10/17]

<はじめに>

- + “悪文”は誰でも書いてしまうが、それは単に“技術的問題”に過ぎない。
(そこに書かれている内容とは無関係)

<第一章:なぜ作文の技術か>

- + “作文の技術”は、“小説の技術”とは異なる。
(言葉の芸術としての文学は、作文技術の世界とは、次元を異にしている)
(“芸術として描かれた花” と “植物図鑑の図として描かれた花” の違い)
- + “作文の技術”は“実用的な＝読む側にとってわかりやすい 文章” を書く技術。
- + “話す”ということと、“作文”ということは、全く別技術。
(“会話ができる” ことと “語学を修めている”こととは、異なる)
(“話すように書く”ことなどは出来ない)
- + “見たままに書く”ことも、物理量的に不可能。
- + 日本語の作文技術とは、“道具としての日本語”を、“正しく扱う”という技術。
- + 日本語は、決して特殊な言語でも、特別な言語でも、非論理的な言語でも無い。
(言語とは、そなわち“その社会の論理”そのものであるのだから、
そもそも“非論理的な言語”などは存在し得ない)
(その言語が“倫理的に”見えたり、“非論理的に”見えたりするのは、
“その言語を使う人間”、あるいは“その言語”の使い方の問題)

>> 第一章を読んでの私見

- + 「言葉は道具」
- + 「道具の扱い(例えば絵筆の扱い、絵具の扱い)に習熟せず、
かきたいものがかけるはずもない」
- + 「故に、“道具としての言葉の使い方”＝“日本語の作文技法”の習熟を目指すことは、
芸術表現・正確性表現、いずれの高みを志すにせよ、必須」

+「よって、

“シナリオを満足に書けるようになるため、日本語の作文技術を学ぶ” というアプローチは、
極めて“理に適っている”」

[二日目:09/10/18]

<第二章:修飾する側と される側>

+ わかりにくい文章の典型例は、

“修飾する言葉とされる言葉の繋がりが明白で無い” というもの

(例文)

[私は狩野さんが桜崎さんがきゃなさんがいたイベント会場にいたと証言したのかと誤解した]

→ 上記文章の、文章全体の主語は“私”で、述語は“誤解した”。

→ この間に、修飾・被修飾関係にある言葉がいくつも、入れ子のように入っているので、
わかりづらい。

+ そのような解りづらい文章は、語順を変え、

“修飾する言葉と、される言葉をセットに”するだけで読みやすくなる。

(例文)

「きゃなさんがいたイベント会場に桜崎さんがいたと狩野さんが証言したのかと私は誤解した」

→ 読点をやカッコ入れると、さらに“セット”を明確化できるが、それは後の章で勉強。

一応(例文)2

「『“きゃなさんがいたイベント会場”に桜崎さんがいた』と、狩野さんが証言したのかと、
私は誤解した」

+ 日本語の大黒柱は “述語”。主語では無い。

→上の記例でも、主語(私は)を省いても、書かれていることの意味はとれる。

(例文)

「『“きゃなさんがいたイベント会場”に桜崎さんがいた』と、狩野さんが証言したのかと、
誤解した」

→しかし、述語(誤解した)を省いた場合、書かれていることの意味をとることは、ほとんど不可能になる。

(例文2)

「『“きゃなさんがいたイベント会場”に桜崎さんがいた』と、狩野さんが証言したのかと、私は」
(理解した、誤解した、恐怖した、軽蔑した、尊敬した——等、いかような意味にも読みとり得てしまうので)

+ そして“修飾される言葉”は常に、“そのセット”の中の、述語。

→ <“きゃなさんがいた” = 修飾する言葉
: “イベント会場” = 修飾される言葉 = 述語>

<“きゃなさんがいたイベント会場に” = 修飾する言葉
: “桜崎さんがいた” = 修飾される言葉 = 述語>

<“きゃなさんがいたイベント会場に桜崎さんがいたと” = 修飾する言葉
: “狩野さんが証言した” = 修飾される言葉 = 述語>

<“きゃなさんがいたイベント会場に桜崎さんがいたと狩野さんが証言したのかと私は” = 修飾する言葉
: “誤解した” = 修飾される言葉 = 述語>

→ この“セット”が不均衡だ (修飾語・被修飾語のいずれかが不足している) と、日本語は意味を取れなくなる。

(例)「きゃなさんは狩野さんと同じように絵を描けない」の場合。

→<きゃなさんは : 狩野さんと同じように絵を描けない> が、セットになっているのに対して、
<狩野さんは : (述語が不足しています!) > となってしまうので、

結果、「狩野さんは絵を描けるようにも / 狩野さんも絵を描けないようにも」読めてしまう。

例文内の情報だけから その意味するところを完全に読みとることは不可能。

→ 解決するための方法は、“不足している、<狩野さんセットの修飾語>を補う”こと。

(例文)「きゃなさんは狩野さんが絵を描けるのと同じように絵を描けない」

→ しかし、これも 『きゃなさん:絵を描けない』のセットが離れ過ぎているのでわかりづらい。

ので、近づけて解消。

(例文2)「狩野さんが絵を描けるのと同じようにきやなさんは絵を描けない」

(これも当然、助詞とか読点とかカッコとかでさらに読みやすく出来るが、それは後の章で勉強)

>> 第二章を読んでの私見

+

1:「どの言葉を」「どの言葉が修飾しているか」の関係を常に意識し、
“セット内の不足を発生させない”こと。

2:「“セット内の、修飾語と被修飾語”の距離は、出来る限り近づけること」

…“極端に意味が取りづらい文章” や “意味を取れない文章”を書いてしまうことは、
この二点を守るだけで避けられる。

+ カッコや読点を、“そのセットを明確化するため”に、私が使っていたということが、今回の学習の副産物として判明した(ように思える)。

その辺の使い方の“技術”についても学習し、改善すべき点があるのであれば、積極的に改善したい。

[三日目:09/10/19,20]

<第三章:修飾の順序>

+ “主語”ではなく、“修飾される側の言葉” が 文章の核である以上、
“修飾する言葉” には、文法上の優劣は無い。

(例): “「赤い”、“丸い”、“大きな”ボール」は、
「赤い丸い大きなボール」でも「大きな赤い丸いボール」でも「丸い大きな赤いボール」
どう表記しても文法上正しく、意味に差も出ない。

+しかし、“修飾する言葉”によっては、“順序による誤解の招きやすさ”を産んでしまうことがある。

(例):「“赤い”“大きな”“水玉模様の” ボール」は、

(どう表記しても文法上は正しく、意味に差も出ないはずなのに)

「水玉模様の赤い大きなボール」と書いたときと、

「赤い水玉模様の大きなボール」や「大きな赤い水玉模様のボール」と書いたときとは、
意味が明確に違って見えてしまう。

(赤い、大きな、が、ボールではなく、水玉模様にかかっているように読めてしまう)

+ ここで、「状態を説明する単語」＝“形容詞” と、

「単語ではない、状態を説明する言葉」＝“形容句” とに、“修飾する側”の言葉を2分類してみる。

(例) : 「進行豹が “おしゃべりな”、“オウムを肩にのせた”、“禿げた”、男」だとする。

→ この場合 “おしゃべりな”、“禿げた” は 「状態を説明する単語」なので“形容詞”。

“オウムを肩に乗せた”は、「単語では無い、状態を説明する言葉」なので“形容句”。

+ “形容詞”と“形容句”を一つの文章内に併記する場合は、

『句を先、詞を後』にすると、誤解を招きづらい。

(例):「オウムを肩にのせたおしゃべりな禿げた男進行豹」が 『句を先、詞を後』

「おしゃべりなオウムを肩にのせた禿げた男進行豹」とか

「おしゃべりな禿げたオウムを肩にのせた男進行豹」などが、『詞を先、句を後』の例。

→『詞を先、句を後』にすると、“形容詞”が“句の中の名詞”を形容しているように誤読されやすくなってしまう。

→冒頭の例の、「水玉模様の」も <形容句>なので、

上記『句を先” “詞を後”』ルールを適用した場合に、もつとも誤解を防ぎやすくなった。

+名詞ではなく、動詞が“修飾される語”となる場合にも同じく、

『句を先、詞を後』ルールが適用できる。

(例): [“静かに”、“素早く”、“目を閉じて”、祈る] 場合。

「目を閉じて静かに素早く祈る」のであれば誤読され辛いが、

「静かに目を閉じて素早く祈る」とか

「素早く静かに目を閉じて祈る」とかしてしまうと、

“形容詞”が、“形容句の中の名詞”を形容しているように、やはり誤読されやすくなってしまう。

ので、『“句を先、詞を後、ルール”は、“修飾される言葉”の性質に左右されず、有効』

+ “坂道で”、“大きな荷物をかかえて”、“激しく” 転んだ。 場合はどうか？

- 1:「激しく大きな荷物を抱えて坂道で転んだ」
- 2:「激しく坂道で大きな荷物を抱えて転んだ」
- 3:「坂道で大きな荷物を抱えて激しく転んだ」
- 4:「坂道で激しく大きな荷物を抱えて転んだ」
- 5:「大きな荷物を抱えて激しく坂道で転んだ」
- 6:「大きな荷物を抱えて坂道で激しく転んだ」

→ 読みやすい「3,6」は、『句が先、詞が後』ルールに適している。
(この例の場合、“激しく”が形容詞で、他二つは形容句なので)

- 3:「坂道で大きな荷物を抱えて激しく転んだ」
6:「大きな荷物を抱えて坂道で激しく転んだ」

比較をすると 「6の方がすんなり読める」ように思える。

+ 【長い形容句】と【短い形容句】がある場合、長いものを先にした方がおさまりがいい]
(=長い形容句を文頭に持ってくるルール)

→上記例の、“坂道で” “大きな荷物を抱えて”の長さを変えてみる。
「“ダラダラと長い坂道で”、“荷物を抱えて”」

- 3':「ダラダラと長い坂道で荷物を抱えて激しく転んだ」
6':「荷物を抱えてダラダラと長い坂道で激しく転んだ」

比較をすると、「今度は3'の方がすんなり読めるようになった」のではないかと。

+ 「“実に一千万円を以上費用をかけて”、“ゲームのシナリオを”、“上手に”、書いた」
場合は、どうか？

- 1:「上手に実に一千万円以上の費用をかけてゲームのシナリオを書いた」

- 2:「上手にゲームのシナリオを実に一千万円以上の費用をかけて書いた」
- 3:「実に一千万円以上の費用をかけて上手にゲームのシナリオを書いた」
- 4:「実に一千万円以上の費用をかけてゲームのシナリオを上手に書いた」
- 5:「ゲームのシナリオを上手に実に一千万円以上の費用をかけて書いた」
- 6:「ゲームのシナリオを実に一千万円以上の費用をかけて上手に書いた」

→ この場合、「“上手に”という形容詞が後」 になってるのは、4と6。

- 4:「実に一千万円以上の費用をかけてゲームのシナリオを上手に書いた」
- 6:「ゲームのシナリオを実に一千万円以上の費用をかけて上手に書いた」

→ 「長い形容句が先」ルールだと、4の方が読みやすい筈だが、
6の方が、より読みやすい文章になっている。

→ それは何故か？

「“修飾を受ける言葉”である『書いた』に対する重要度が一番高いのは、
『シナリオを』という“修飾する言葉”だからである」

+ 【「最も重要度が高い“修飾する言葉”を持つ形容句」が、文頭にくると収まりが良くなる】
(=重要度が高い形容句を文頭にもってくるルール)

→ 上記例の“修飾を受ける言葉”を 『書いた』から『売りつけた』に、
“実に一千万円以上の報酬で” 変えてみると、

- 1:「上手に実に一千万円以上の報酬でゲームのシナリオを売りつけた」
- 2:「上手にゲームのシナリオを実に一千万円以上の報酬で売りつけた」
- 3:「実に一千万円以上の報酬で上手にゲームのシナリオを売りつけた」
- 4:「実に一千万円以上の報酬でゲームのシナリオを上手に売りつけた」
- 5:「ゲームのシナリオを上手に実に一千万円以上の報酬で売りつけた」
- 6:「ゲームのシナリオを実に一千万円以上の報酬で上手に売りつけた」

→4:「実に一千万円以上の報酬でゲームのシナリオを上手に売りつけた」
6:「ゲームのシナリオを実に一千万円以上の報酬で上手に売りつけた」

…今度は(長さ関係はほぼ変化していないにも関わらず) 6よりも4の方が、より読みやすい文章になっている。

これは、“修飾を受ける言葉”を『売りつけた』に変化させたことにより、“修飾をする言葉”の重要度が「一千万円」>「シナリオ」と、変化したからである。

+ 上記例から、以下のことがわかる。

【“重要度が高い形容句を文頭にもってくるルール”は、“長い形容句を文頭に持ってくる”ルールに『優先する』】

+ しかし、最重要なのは。

(上記2ルールよりも、崩れたときの誤読度を激しくあげてしまうのは)

【句が先、詞が後】ルールである。

+ よって、『修飾の順序』を、より文章を読みやすいものとするためには、その重要度順に、

1:【句が先、詞が後】

2:【重要度が高い形容句を分頭にもってくる】

3:【長い形容句を文頭に持ってくる】

…という三つのルールを適用することが有用であることが、理解できる。

>> 第三章を読んでの私見

+【句が先、詞が後】は、絶対ルール。単純な文章だと間違いようも無いが、込み入っているとやらかしてしまうことがあるので、注意する。

+【重要度】は“どの言葉が修飾され”、“どの言葉が修飾しているのか”を常に意識する上でも、やはり注意した方が絶対に良い。

+【長さ】は、まあ、体裁の問題(と程度に意識しておけばよいと思う)。“変えてもいいけど、迷った時には適用しておけば無難”、とか。

+“自分なりの例文作成”が今回は恐ろしく難しく、故に特に勉強になったように思える。

[四日目:09/10/20・21]

<第四章:句読点の打ち方>

+ 読点の打ち方で、文章の意味は180度変わってしまう。

(例文):「まぐおさんは狡猾な叙述トリックを書きあげた進行豹を驚かせた」

→「まぐおさんは狡猾な叙述トリックを書きあげた、進行豹を驚かせた」

(“狡猾な叙述トリック”を書きあげたのは、まぐおさん)

→「まぐおさんは、狡猾な叙述トリックを書きあげた進行豹を驚かせた」

(“狡猾な叙述トリック”を書きあげたのは、進行豹)

+ “修飾する語と、修飾される語とのセット”を明確化するためには、句点・読点以外にも、各種のカッコ記号や符号などが用いられる。

+ 『一つの言葉に、“長い修飾する語が複数” かかっているときには、その切れ目に読点を打つ』 (=【読点の打ち方、第一のルール】)

(例文):

「短時間で一プレイできる何プレイも熱中してやりこめる簡単にダウンロードできる低価格なゲームが遊びたい」

→

修飾される語＝“ゲームが遊びたい” に、

修飾する語＝“短時間で一プレイできる”、“何プレイも熱中してやりこめる”、

“簡単にダウンロードできる”、“低価格な” が かかっている。 故に、その切れ目に読点を打つと――

「短時間で一プレイできる、何プレイも熱中してやりこめる、簡単にダウンロードできる、低価格なゲームが遊びたい」

――となり、非常に読みやすく、意味を掴みやすくなる。

+『打たなくてよい読点(修飾する語が極端に短く、誤解を招かなきようも無い場合など)は、打たない』
(=[読点の打ち方、第二のルール])

(例文): 「犬は違いますがニワトリもペンギンもスズメも鳥の仲間です」

→この文章に対し、“修飾する語の切れ目ごとに読点を打つ”と――

「犬は違いますが、ニワトリも、ペンギンも、スズメも、鳥の仲間です」

――となってしまう、

「犬は違いますが、ニワトリもペンギンもスズメも鳥の仲間です」

と比して、明らかに、読みづらく、意味を取りづらくしてしまう。

ましてや、

「犬は違いますが (ニワトリも)、ペンギンもスズメも鳥の仲間です」

とやってしまうと、意味まで変わってしまう。

故に、『無駄な読点は打たず、無駄な区切りは省略する』ことは非常に重要。

+『“修飾する語” が極端に短い場合でも、

それが “【修飾は、句が先・語が後】ルール” に反する時には、その修飾語の後に読点を打つ』

(=[読点の打ち方、第三のルール])

(例文): 「怒りっぽい進行豹のことをいつもたしなめる狩野さん」

この例文の、“怒りっぽい” と “進行豹のことをいつもたしなめる” が、

共に “狩野さん” を修飾している場合には、

【句が先、語が後】ルールに反しているので、非常に誤読の可能性を高めてしまっている。

故に、「進行豹のことをいつもたしなめる怒りっぽい狩野さん」と、同ルールに従うように整形するのが原則的には良いのだが、周辺との関係やリズム上、そうできないとき、あるいは“怒りっぽい”を特に強調したいときなどには、

「怒りっぽい、進行豹のことをいつもたしなめる狩野さん」

とやれば、誤読の可能性を大きく減らせる。

→ これも、「怒りっぽい、進行豹のことを、いつもたしなめる狩野さん」と、

“無駄な読点”を打ってしまうと、意味不明文に逆戻りしてしまうので――

くれぐれも『無駄な読点は打たない(むしろ“打ってはならない”)』ルールは厳守せねばならない。

- + 『“語りたい内容がを明白にする言葉”の終わりには、それが例え一単語に対してであろうとも読点を打つ』（＝【読点の打ち方、第四のルール】）

(例文):「髪の毛が、抜けた」

- 「髪の毛が抜けた」という描写をしたいのではなく、“抜けたものが＜髪の毛＞だったことを語りたい”場合には、上記の読点は必要。

- + 『重文(対等な意味の文章が複数並ぶ)の切れ目』
『“述語が先にくる倒置”の、述語の後』
『呼びかけ、応答、驚嘆などの言葉の後』には、読点を打つ。
(＝【読点の打ち方、第五のルール】)

(例文1) 「狩野さんを倒し、進行豹を寝こませ、桜崎さんを入院させ。

そしてインフルエンザは不機嫌亭ゲーム班を壊滅させた」

(例文2). 「やはりpomriceか、新型インフルエンザウイルスを弄んでいたのは」

(例文3). 「おい、pomrice」

「や、名探偵ご登場www ……オレを捕まえにキタってワケwwwwwwww??」

>> 第四章を読んでの私見

- + 無駄な読点を打ってはいけない。無駄な読点を打ってはいけない。無駄な読点を打ってはいけない。
- + 無意味なクギリを使ってはいけない。無意味なクギリを使ってはいけない。無意味な区切りを使ってはいけない。
- + “”とか『』とか【】の使い方のルールを、“自分の中で明確化”すれば、無駄使用を防げるようになるかもしれない。
- + “読みやすくするための点” だから“読点”。 “結句させる点” だから “句点”。

[五日目:09/10/22]

<第五章:漢字とカナの心理>

+ 漢字ばかりの文も、カナばかりの文も明らかに読みづらい。

(例文):「漢字許りの文も、仮名許りの文も明らかに読み辛い」

「かんじばかりのぶんも、かなばかりのぶんもあきらかによみづらい」

+ 読みやすくするための手段、としては“わかち書き”がある。

(例文):「かんじばかりの ぶんも、かなばかりの ぶんも あきらかに よみづらい」

+ 漢字・カナの“バランスを取った併用”は、
この “わかち書き”と同じ効果を発揮することが出来る。

+ 故に、同じ“語”にも、<漢字表記の方が読みやすくなる場合> と
<カナ表記の方が読みやすくなる場合>とが存在する。

(例文):「上記の結論に対し、『少なくとも一作品の中では表記を統一するべきだ』とする
御意見も当然にあらうかと思う」

「そして私も、“統一感による美”が確実に存在することを理解している。

故に、『どちらを選択するかは趣味の問題』という解釈で、ここは何卒ご容赦ねがいたい」

→上の例を、“とすご意見も当然に——” と変えてみる。

あるいは下の例を、“ここは何卒御容赦——” と変えてみる。

その場合どちらも、“変える前の表記”の方が、読み易さにおいて優れるように思われる。

+ “言葉の置き換え”によって“わかち書き”効果を産むことができ、
読みやすさをアップできる場合には、そうする。

→「適宜用いる」と「適切に用いる」。

どちらを使っても差支えない場合には、後者を用いたほうが読みやすい。

+ “”“一つの漢字+送り仮名。が ややこしい事態を招きかねない場合には、
「そうした事態を招かない送り方」をするべき。

→“はじまる”は、“始る”“始まる”、どちらの送り方でも正しい。

がしかし、“はじめる”を漢字表記する場合には、100% “始める”と送ることになる。

「“始る”と“始める”のセット」より、

「“始まる”と“始める”のセット」の方が絶対に明快なので、この場合には、

“始まる”を送り仮名として選択すべき。

+ そうで無い場合の送り方は、完全に趣味の問題。

とはいえ、「送り方が わかち書き効果の過多に影響するケースは、ほぼ無い」ので、

少なくとも、一作品内では統一をすべきである。

(例文):「こんな例文に一時間も悩むだなんて、“有り得ない”」

「こんな例文に一時間も悩むだなんて、“有得ない”」

——これは、どっちを採用しても良いが、採用した方で一作品内での統一を保つべき。

+ 読点を[四日目]で勉強した以外の目的、

つまりは “単なるわかち書きを果すのみ目的” のために使用してはならない。

漢字カナの使い分け方の工夫でも どうにも読み辛くなってしまう場合には、

“実際に わかち書き”をしまえば良い。

>> 第五章を読んでの私見

+

ネット上の文章では横書きが主体となることが多い。

そして日本語では、縦書き時より横書き時の方が“つなげて書いたときの読み辛さ”が増大してしまう。

故にネット上の文章において“わかち書き”を適切に用いることは、非常に有用。

+ 以前に(私は、よほど熱心に この章を)読み込んでいたのか、

この章では、読んでいることの殆どが “既に心がけていること” であったように思う。

+ が、“送り仮名の統一”に関しては意識を忘れやすい気がするので、今後は より心がけていきたい。

[六日目:09/10/23]

<第六章:助詞の使い方 (の、勝手に前半) / 『“は” の使い方』>

+ 助詞は“文章全体の構造を支配”する 極めて重要な、日本語の根幹を為す品詞である。
→日本語を正確に使いこなせるかは、助詞を正確に使いこなせるかに掛かってくる。

+ 助詞の中で最も重要で、最も便利なものは <は>。

『進行豹が狩野さんにコグレさんを紹介した』という一文は
「進行豹<は>狩野さんにコグレさんを紹介した」 とも
「狩野さんに<は>進行豹がコグレさんを紹介した」 とも
「コグレさん<は>進行豹が狩野さんに紹介した」とも書ける。

+ つまり.<は> は、
1:<が>の代用をする
2:<に>の補語としてくっつく
3:<を>の代用をする
ことが出来。

いずれの場合にも、<は>に補助された語を、

“その文章の中で、最も重要なものとして引き立たせる＝主格とする” ことが出来る。

+ そしてまた、<は> は、“同じ重要度を持つ二つの主格を統合”するという能力も持つ。

→『不機嫌亭ゲーム班一同が、
不機嫌亭ゲーム班一同が突然の販売停止通告を受けたことにより、大変なショックを受けた』

という文章の構造は、

「修飾される語」である “ショックを受けた”に、
「修飾する語」の、“不機嫌亭ゲーム班一同が”、“不機嫌(略)を受けたことにより”、“大変な”、が
かかっている——というものである。

→ これを、<は>を用いることなく 短くまとめようと試みると、

『不機嫌亭ゲーム班一同が突然の販売停止通告を受けたことにより大変なショックを受けた』

あるいは
『不機嫌亭ゲーム班一同が、突然の販売停止通告を受けたことにより大変なショックを受けた』
あるいは、
『不機嫌亭ゲーム班一同が突然の販売停止通告を受けたことにより、大変なショックをうけた』
あるいは、
『不機嫌亭ゲーム班一同が、突然の販売停止通告を受けたことにより、大変なショックをうけた』
——等となるかと思われる。

この いずれの例においても、
“誰がショックを受けたのか” もしくは “誰が販売停止通告を受けたのか” という重要な情報が、
“欠如している” ないしは “極めて読みとりづらくなってしまっている” ことは明白である。

→ しかし、<は>を用いれば、

『不機嫌亭ゲーム班一同は突然の販売停止通告を受けたことにより大変なショックを受けた』

となって、“不機嫌亭ゲーム班一同がショックを受けたこと” と “不機嫌(略)が販売停止通告を受けたこと” とが共に、非常に明快な形でまとめられる。

→ これが、<は>の持つ、『二つの主格統合の能力』であり、<が>は これを持たない。

+ <は>には、『見えていない対照語から、<は>をつけられた語を“限定”する能力』もある。

→『狩野さんは絵を描く』 と書いたときには、
“狩野さん以外のことも、言外に述べている”し
“その<以外の誰か>が絵を描かないことも、言外に述べている”。

そして、<が>には この能力は無いので、

「狩野さんが絵を描く」は、単なる事実を述べていることとなり、
「狩野さんは絵を描く」なら、
“狩野さんは絵を描くが、他のみんなは絵を描かない” ことを言外に述べていることとなる。

+ことほど左様に<は>は、“複雑かつ強力な助詞”なので、使い方を間違えるとヤヤコシイことになる。

→ 『狩野さんには人差し指のペンダコが無い、が中指にはある』 という例文は、

(他の人はそうであるのに) 「狩野さん<には>ペンダコが無い」
しかし 「中指には(ペンダコが)ある」 ——という二つの意味を内包し、

- 1:他の人は、たいてい人差し指にペンダコを持つ
- 2:狩野さんの人差し指にペンダコは無い
- 3:狩野さんの中指にはペンダコがある

という三つの事実を暗示/明示していることとなる。

しかし、例えば「1」が事実でない場合には、不要な誤解を防ぐため、
<には> や <は>を使うことは避けなければならない。

その場合には、

『狩野さんの人差し指にはペンダコが無い、が中指にはある』 とやって、

“狩野さん”にかかっていた <は>の持つ、『限定をする能力』(の暗示)から逃れなければいけない。

(かつ、人差し指<には>とやったことにより、“他の指と比較しての人差し指”を暗示できるので、
後段の、“が、中指——”へ、よりスッキリと文を導くこともできる)

- + また、ことほどきように <は> は強力すぎるので、
“<は>を複数持つ文章”においては、
“ <は>そのものを統合する工夫”をすると、理解しやすい文章を作成しやすくなる。

→ 『進行豹はシナリオ執筆時には本当には集中できていない』

この文章を、最高にややこしく読もうとすると

- 1:(他のシナリオライターさんはそうできるのに) “進行豹は”
- 2:(他の場合にならそうできるのに) “シナリオ執筆時には”
- 3:(集中してフリをしているが) “本当には”

——という、それぞれの〈暗示されている対照〉が読みとれてしまう。

上記の文は、例えば——

『シナリオ執筆には本当には集中できない進行豹』 (1の誤読要素を防止する場合)

『進行豹はシナリオ執筆時、本当には集中できていない』 (2の誤読要素を防止する場合)

『進行豹はシナリオ執筆時には、ある程度の集中しかできていない』 (3の誤読要素を防止する場合)

『シナリオ執筆時に本当には集中できない進行豹』 (1,2防止)

『シナリオ執筆時には、ある程度のしか集中しかできていない進行豹』 (1,3防止)

『進行豹には、シナリオ執筆時にある程度の集中しか出来ない』 (2,3防止)

—— などと書き変えた方が、“いわんとすることを、誤解無く伝える”ことが出来るようになる。

>> 第六章(勝手に前半)を読んでの私見

+ <は>は、ウルトラ強力で、ウルトラややこしい。

+ <は>を他の助詞で代用できるときには、絶対にそうした方がいい。

<は>を安易に使うのならば、その安易さの分だけ、日本語習熟が困難になっていく。

+ “<は>を書いた時には、他の助詞で代用できないかを考える習慣”をつけるべき。

[六日目-の二日目:09/10/24]

<第六章:助詞の使い方(勝手に後半) / <まで>と<までに>と<が>と<並列>と>

+ <まで> と <までに> とは、当然ながら全然違う働きをする

→ 『あさってまでに筋トレしてね』

(マネージャーはトレーニングスケジュール管理を ある程度任せてくれている)が、

『あさってまで筋トレしてね』

(マネージャーは超スパルタ訓練をほどこしている)

+ <まで> と <までに> の 違いは <に> の有無。

<に>の機能については、

<中>・<中に>、においての両者の差異を あわせ考えると理解しやすい。

→ 『十月中シナリオに集中する』

(十月の間はずっと シナリオに集中する)

『十月中にシナリオに集中する』

(十月が終わり切るまでのいずれかの時点でシナリオに集中しますホントです)

→ “十月”という一ヶ月間を、<中>の場合は そのまま示すが、

<に> が加わることにより、“その中のいずれかの時点” を示すように変化している。

これは、冒頭の例の<まで> <までに>の場合も同じ。

(今日～あさってまでの“期間” と、“あさってまでに”のある一時点)

+ つまり <に> は、【ある“期間”から 特定の“時点”を抽出する、という機能】を持つ。

+ ので、 <に>を(特に時間を示す語とあわせて)用いるときも、<は>と同様、

“限定したいのか、そうでないのか”を意識することが必要

→ 『締切まで休まず必死に書きます!!』

(締切を破りそうな時の、正しい約束)

『締切までに休まず必死に書きます!!』

(あとで、「いや、“までに”って言いました」という言い逃れが可能←次の仕事が無くなるリスクあり)

『締切までには休まず必死に書きます!!』

(<に>+<は>で、↑の意図がひとときわ際立つ。

ので「“締切まで”、ですよね?」と、念押しをされる確率アップ)

- + <が>は、逆接の(前の語から続くと予想させる内容と、実際に後につづく語の内容とが異なる)場合に用いる接続語。

(例文):『筆記試験で満点をとったが、プロテストには合格しなかった』

(筆記で満点→合格が予想される <が> そうではなかった)

- + しかし、<が>は、“順接の接続詞”としても、“順接でも逆接でもない接続詞”としても用いることも出来てしまう。

(例文):『筆記試験で満点をとったが、プロテストに合格した』

(なんらかの含みがあるようにも読めるものの、意味的には完全に順接)

『私は筆記試験で満点をとりましたが、あなたの得点が何点だったかを伺いたい』

(この場合の<が>を代用するなら <さて>、<そこで>等、

“順節(だが、話題を変えるニュアンスをもつ)接続詞を用いるのが適切かと思われる)

- + 後段の例のような<が>の使い方がなされると、読み手は軽い混乱をきたしかねない。なので、<が>を用いるときには、そのような“便利使い”をしていないかに注意し、そうなっている場合には、言い換えを用いる必要がある。

(言い換え例):『筆記試験で満点をとった、そしてプロテストに合格した』

『私は筆記試験で満点をとりました。さて、あなたの得点が何点だったかを伺いたい』

- + <と>は、並列の(同じ意味合いの言葉を複数ならべるときに用いる)助詞。仲間には <や> や <も> 、 <か> 、 <とか> 、 <に> 、などがある。

+ 並列の助詞は、“同じ意味合いの言葉全てにつける” と、最も誤解を防ぎやすい。

(例文): 「狩野さんと進行豹と桜崎さんとが激論を戦わせた」

(みつどもえの論戦であると明白)

+ これだと重い場合(すごく沢山を並列するなど)には
“冒頭”だけに <と>などをつけると落ち着き良く、誤解も招きづらい。

→

「狩野さんと進行豹、桜崎さん、きゃなさん、pomriceさん、はたのさん、空木さん、2spadeさんが激論を戦わせた」 (全員での論戦、であると明白)

→ これが、中途半端に <と> を打つと、意味を著しく混乱させてしまう。

「狩野さんと進行豹、桜崎さん、きゃなさん、pomriceさんと、はたのさん、空木さん、2spadeさんが激論を戦わせた」

(『狩野・進行豹・桜崎・きゃな連合軍 VS pom、はたの、空木、2sp同盟軍』とも読めるし、
『“狩野 VS 進行桜きゃな 軍の戦い”』と『“pom VS はた空2sp軍の戦い”』とが同時並行で起きた、とも読めるし、『全員の論戦』とも読める)

+ ので、<並列の助詞> は、“全項目につける” か “冒頭の語だけにつける” かで徹底すべき。
“チーム分け”をしたいときは、文章構造の工夫や、<他の並列の助詞>を併用することによって、誤解を防ぐ努力が必要。

(例):

「狩野さんと、進行豹と、桜崎さんと、きゃなさんと、pomriceさんと、はたのさんと、空木さんと、2spadeさんとが激論を戦わせた」 (全員での論戦)

「狩野さん・進行豹 と 桜崎さん・きゃなさんも、pomriceさん・はたのさん と 空木さん・2sapadeさん
も、同じく論戦した」

(“狩野&進行豹 VS 桜崎&きゃな” 同時並行で “pomrice&はたの VS “空木&2spade”)

>> 第六章(勝手に後半)を読んでの私見

- + <に> <は> は、限定。併用すると“超限定”。

強力だけに、使い方には注意しないと、予想外の意味を与えてしまう。

- + “<が>は便利に使えるが、使い方には注意しなくてはいけない”

…みたいな、論旨を不明瞭とする接続をしてはいけない。

“<が>は便利に使える。それだけに使い方には、特に注意をしなくてはいけない”

と、書きたい。

- + 並列の<と> とかは、(長くなりすぎたなあ) とか (リズムをとるため) とかに、ハンパな位置で使っちゃいそう(というか、多分実際使ってたの)で、非常に怖い!

今後は、<と>と、<に>、<は>、<が>の使い方には、特に注意していきたい。

[七日目:09/10/25]

<第七章:段落>

+“段落”とは即ち“改行”のこと。

+“改行”は、「一つの思想単位の結ばれるとき」(≡ 一つの話題が区切られるとき)にのみ行う。

『その他の場合には、決して改行してはならない』

→

「短い文章をいくつも繋ぐ。それはリズムを出すための一つの手法だ。無論 他の全てと同様、この手法にも一長一短がある。ところで、長短と言えば帯だ。私は一度でいいから、“女性の帯を引っ張ってくるくる回す”という脱がせ方をしてみたい。」

——という文章の場合、“話題は” <短い文章をいくつも繋ぐという手法>について と、 <帯[1]、および帯に関する欲求>の二つしかない。

故に改行は——

“ ~~~一長一短がある。

ところで、長短といえば” —— に入れるべきであり、他に入れてはならない。

+ 意味的ではない、原稿用紙的(=ディスプレイ表示上)の都合で、

<改行でないのに、見かけ上の行頭と“。”直後の書きだしとが一致してしまう>場合には、

“そこで改行がされていない”ことを明確化するために、文字を増やしたり削ったりの工夫をすると良い。

また、(改行後の)“行頭の一字を下げる”ことには、そのような誤解の可能性を減ずる効果がある。

>> 第七章を読んだ私の私見

+原稿用紙でのルール、ディスプレイ表示でのルール、ゲーム画面上でのルールでは、

“どのようにすれば見やすく、読みやすくなるかが異なって来る”が、それぞれのフォーマット上において、

<どこで、意味の区切りが来ているのか>を明確化する工夫は必要。

私の場合は、ディスプレイ表示上においては<空行を入れる>ことで段落表示をしているように思う。

- + 行頭の一字下げの重要性を初めて理解。心がけていきたい。
- + 六章があまりにしんどかったので、この章の短さはすごく助かった。
これも恐らくは、“読み手に配慮しての構成”であろうと思うので、見習いたい。

[八日目:09/10/26]

<第八章:無神経な文章>

- + 無神経な文章には、以下の6パターンがある。
すなわち【紋切り型の多用】【配慮の無い繰り返し】【書き手が自分でウケている】【下品な体言止め】
【考えなしの過去形】【サボリ敬語】。
- + 【紋切り型の多用】は、文字通り“紋切り型＝手あかにまみれた表現”を平然と多用する文章のこと。

(例文):

「無期限亭御機嫌ゲーム班—— 2007年10月12日開設の同人ゲームサークルである。だが このサークル、そんじょそらの同人ゲームサークルとは一味違う。

驚くなかれ、メンバーの全てがピチピチの美少女ばかりなのだ！ その一人、進行豹子たん(ツンデレ)に突撃取材を敢行してみた。フヒヒ…サーセンwww

突撃といっても性的な意味ではないので(苦笑)、読者諸兄におかれては安心をしていただきたい。……って、自分で書いて嫌になってきた orz」

- + 紋切型の多用に どのような問題点があるのかについては、以下の文章が とても参考になる。

(以下引用)

<堇の花を見ると、「可憐だ」と私たちは感じる。それはそういう感じ方の通年があるからである。しかしほんとうは私は、堇の黒ずんだような紫色の花を見たとき、何か不吉な不安な気持ちをいだくのである。しかし、その一瞬後には、私は常識に負けて、その花を「可憐」なのだ、と思いこんでしまう。文章に書くときに、可憐だと書きたい衝動を感じる。たいてい人は、この通念化の衝動に負けてしまって、堇と言うとすぐ可憐なという形容詞をつけてしまう。このときの一瞬の印象を正確につかまえることが、文章の表現の勝負を決定するところだ、と私は思っている。この一瞬間に私を動かした小さな紫色の花の不吉な感じを、通年に踏みつけられる前に救い上げて自分のものにしなければならないのである。>

(以上引用:『小説の書き方』野間宏・編 中の 伊藤整氏の文章を、『日本語の書き方』より)

+ 【配慮の無い繰り返し】

(例文):

「進行豹は起きてすぐ制作日誌を書きました。そしてすぐ車を走らせ、狩野さんの家に行きました。そして借りていた本を返してすぐに家に帰りました。そしてすぐパソコンを立ち上げました。そしてすぐ——」

→ 言葉や構造を変えれば、“配慮の無い繰り返し”は防げる。

(例文・改善例):

「進行豹は起きてすぐ制作日誌を書きました。書き終わるとそのまま車を走らせ 狩野さん宅へ。借りていた本を返し、即座に帰宅するや否で立ち上げたのはパソコンでした。その途端——」

+ “のだ。”という終わり方を多用する文章も良くあるが、“のだ。” は、本来
<(××であるから)——のだ> という暗黙を含むべきものである。
繰り返しの多用だけではなく、その点にも気をつけなければならない。

(例文): 「埼玉県には“特徴が無い”という特徴がある。県民も、また同様なのだ」

→<(埼玉県には、“特徴が無い”という特徴があるのだから) 県民も、また同様なのだ。>という含みを持っているので、正しい“のだ”の用法。

これを、

「埼玉県には“特徴が無い”という特徴がある。いっぽう、神奈川県民は都会的なのだ」とやってはダメ。
(“いっぽう、神奈川県民は都会的なのだ”が、正)

+ 【書き手が自分でウケている】

→自分で笑っちゃってるお笑い芸人や落語家は少しも面白くない。

文章も同様。面白いことを書いているときほど、真面目くさっていなければ、せつかくの面白さが半減してしまう。

極端な(例文): 「本当に、すごく面白いオチなんですよ!(笑)。『今度は熱いお茶が一杯怖い』つて来ちゃうんですよ、これが! ネ? 面白いですよね!(爆笑)」

→“面白い”以外でも同様。

例えば“美しい人”を描写したいのであれば、“美しい”という語の明記(≒自分自身がウケてることの表明)はせずに、“その描写で美しさを伝える”べき。

笑わせたい文章、泣かせたい文章、怒りをつたえたい文章——全てにおいて上記の心構えは通じる。

+【下品な体言止め】

(例文):

「下品な体言止め。どんなものかは論より証拠。実例のつもりで書けば、これがなかなか難しい。あれこれ悩んで頭をピシヤリ。髪の毛ハラリで 口あんぐり」

→リズムを出したり、緊迫感を出したりを目的として体言止めを使うことが良いケースもあろうが、乱用は却ってその効力さえをも失わせる。

+【考えなしの過去形】

(例文):

「冬コミ会場にお邪魔した。目を引くデモを展開していた『焼肉万歳』さんにお話をお伺いした。焼肉万歳さんは大阪のサークルさんだった。ならば阪神ファンかと尋ねると、そうでもないとのことだった」

→『焼肉万歳さんは、“今現在も大阪のサークルさん”』なのだから、この過去形は明らかに“考えなし”。「——お伺いした。焼肉万歳さんは、大阪のサークルさんだそうだ。ならば阪神ファン——」 と直すべき。

+ 「書いてから、発表まで間を置かないルポ」などの場合には、過去形はむしろ全体的に封印すべき。

(例文):(10/26に取材し、27日に発表する、“ゲーム開発現場に突入!ルポ)

「不機嫌亭ゲーム班開発室は、修羅場特有のピリピリした空気につつまれている。

『お邪魔します』——声をひそめて侵入すれば、甲高い、神経質そうな声が返ってくる。

「どなたです?」……その頭上にはパックマン髡が輝いている。

この男が、不機嫌亭ゲーム班の大番頭、進行豹だ」

→ “取材をしながら、リアルタイムで書いているわけではないことは、読者にも明白”なので、これをわざわざ、

「不機嫌亭ゲーム班 開発室は、修羅場特有のピリピリした空気につつまれていた。

『お邪魔します』——声をひそめて侵入したところ、甲高い、神経質そうな声が返って来た。」 とやり、読み手さんに、（“だった”のですよ、私が取材したその瞬間には） と、言わずもがなのことを押し付ける必要はない。

+【サボリ敬語】

→語尾になんでも「です」をつける類の敬語。

(例): 「危ないです」「嬉しいです」「ありがたいです」「おかしいです」

→それぞれ、文法的に正しいのは「危険です」「嬉しゅうございます」「ありがとうございます」「異常です」
（「形容詞 + です」は、明治以来の日本語文法に対しての違反）

→ただし、これが「現代の大多数に用いられる文法」であるのなら、もちろん それは
“現代文法として正しい”。

が、『日本語の作文技術』を高めようとするのであれば、“それは旧来の敬語の用法に反している”
ことを知っておく必要があるし、出来る限りは回避すべきでもある。

>> 第八章を読んでの私見

+ 私の場合、「守れていないところがけ」が(現在までのところ)一番多い章。

+ 特に 【下品な体言止め】、【考えなしの過去形】、【サボリ敬語】に対しては、自らの意識の低さを痛感させられた。

+ “ルポにおける現在形の適正使用のススメ”も、非常に参考になった。今後は、こころがけていきたい。

+【書き手が自分でがウケてる文章】は、過去、狩野さんに注意されたことがあったので、こころがけてきていた。

狩野 「自分で自分にツッコんじゃだめでしょ。読んでは側にツッコんでもらわなきゃ」

・・・狩野さんが『日本語の作文技術』を読んでいるとは思えないので、
“そのこころがけは、文章のみならず、マンガにも他の全てにも通ずるものなのかもしれない”とも感じた。

[九日目:09/10/27]

<第九章:リズムと文体>

+ リズムと文体は『応用要素』。特に意識がなくても 基本要素さえ守っていれば“読みやすい日本語を書く”という学習目的は達成できる。

しかし意識できれば、さらに読みやすい日本語を書くことが出来るようになる。

+ “リズムのある文体”を習得するためには、

『自分で書いた文章を朗読してみる』訓練が非常に有効。

+ いわゆる名文、と呼ばれる文章に自分で手を入れてみて、

「その文章のリズムが、“一語の入れ替え”や“助詞の増減”などの非常に小さな違いによって、いかにたやすく壊れてしまうか」——を実感することも、リズムの大切さを理解するためにはとても有効。

>> 第九章を読んだ私の見

+「名文の実例」の紹介がほとんどなので、書かれている内容としては“以上で全て”となるのではではないかと感じた。

+ 自分の練習にのために、「日本語の作文技術」中では紹介されていない、

“私的に、独特で動かし難いリズムがあると感じる書き出し”を例に、“リズム破壊”を試してみたいと思う。

(例文):

『夥しい煤煙の為に、年中どんよりとした感じのする大阪の空も、初夏の頃は藍の色を濃くして浮雲も白く光り始めた。

泥臭い水ではあるが、その空の色をありありと映す川は、水嵩も増して、踊るやうなさざ波を立てて流れている。』

(「大阪の宿」 水上瀧太郎 / 原著は旧字体の漢字。“初夏”には“はつなつ”のルビ)

・この例文の

“初夏(はつなつ)の頃は藍の色を濃くして → 初夏(しよか)には濃い藍色に染まり”に。

“その空の色をありありと→その空の色をありあり”に、変更してみる。

『夥しい煤煙の為に、年中どんよりとした感じのする大阪の空も、初夏には濃い藍色に染まり浮雲も白く光り始めた。

泥臭い水ではあるが、その空の色をありあり映す川は、水嵩も増して、踊るやうなさざ波を立てて流れている。』

→大きめの変更をした一行めのみならず、

「“ありあり<と>” の、<と>しか削除していない」二行目でも、リズムは明確に狂っている。

(声に出して読んでみると、読み辛くなっているのがハッキリ感じられる。念のため ひらがなで、現代かなに書き下してみる)

(元の例文)

『おびたしい ばいえんのために、ねんじゅう どんよりとしたかんじのする おおさかのそらも、はつなつのころは あいのいろをこくして うきぐもも しろくひかりはじめた。

どろくさいみずではあるが、そのそらのいろを ありありとうつす かわは、みずかさもまして おどるようなさざなみをたててながれている』

(いじった例文)

『おびたしい ばいえんのために、ねんじゅう どんよりとしたかんじのする おおさかのそらも、しょかには こいあいいろにそまり うきぐもも しろくひかりはじめた。

どろくさいみずではあるが、そのそらのいろを ありありうつす かわは、みずかさもまして おどるようなさざなみをたててながれている』

→ 書きなおし 読み直してみても 『元の例文の、“初夏の頃は”を“初夏の頃には”にするだけでもリズムが崩れる』とも実感できた。

“はつなつのころは” と “はつなつのころには” のみを取ると、後者の方が読みやすいように思われるので、

<リズムとは、“リズムある言葉、の組み合わせで作るのではなく”、“言葉をスムーズに流す”、ことから自然発生するもの> ——なのではないかとも感じた。

(意識的に切ることも、“流れ”を整えるための手法)

+ ここを“技術論”に落とし込もうとすると、膨大な手数がかかりそうなので、

“例文紹介がほとんど”という構成は正しいように思われる。

「書くこととは、読むこと」なのではないかなあ、とも。

[十日目:09/10/29]

<第十章:書き出しをどうするか>

- + 文書・文章の目的は 「伝えたい内容を伝えること」。
そのためには、「最後まで読んでもらう」ことが必要。
- + 最後まで読んでもらうための、最難関は“書き出し”。
書き出しでの一文で その文章に引き込めれば、
文書の最後まで読んでもらえる確率は飛躍的に向上する。
- + もっとも有力、かつ経験的に有効とされる書き出し手法は、
「いきなり本論」。

以下、

“いきなり本論法”

“引用導入法”

“描写導入法”

——三通りの(代表的な)書き出し法を用いて、例文作成を試みる。

例文において伝えたい内容は、

「“不機嫌亭デザインズという 同人ゲーム制作者さん向けのデザインサポートサービスが開始された”
こと」

<いきなり本論法>

「不機嫌亭デザインズという同人ゲーム制作者を対象としたデザインサポートサービスが開始された。

ロゴ作成、同人名刺やジャケットのデザイン、バナーデザインなどを、【1デザイン=1000円】の
固定料金で行うというサービスである」

<引用導入法>

「『美しきもののみ機能的である』——建築家・丹下健三の言葉はロゴデザインにも通じるかもしれない。

機能的なロゴ—— つまり“人目を引く”ロゴは、必ず美しくなければならないからだ。

そんなロゴ・デザインを、なんと【1デザイン=1000円】で引き受けてくれるサービスが開始された」

<描写導入法>

「<カチ、カチっ——カチ>。

マウスクリックの音に従い、ディスプレイ上のフォントが鮮やかに姿を変えていく。

ここは、“不機嫌亭デザインズ”事務所。

不機嫌亭デザインズは、つい先日開始されたばかりの、同人ゲーム制作者を対象としたデザインサポートサービスだ」

——どれもありがちな導入法だが、

<いきなり本論>以外の二つは、“無駄に興味を引いている”ともいえる。

この文書の目的は“広告・宣伝”にあり、あるいは“そこにしか無い”のだから、

『“広告・宣伝されている内容に興味がない人”を引き付けることは、ハナからとても難しい』。

ので、(他の二つの方法で)せつかく興味を引くことができても「なんだ、宣伝か」で終わってしまう。

これは、“書き手の意図”が、広告宣伝ではない“他の何か”にあったとしても、同じこと。

<引用導入><描写導入>は、“興味のアト”に『書き手の意図が明かされる』ので、“その意図が、読み手の興味とマッチしない場合には、そこで鼻白まれてしまう可能性が高まる”。

しかし、<いきなり本論>は、“最初から意図”で入るので、

“それがダメ”な人にとっては、“最初から終わることが出来る”という親切さを持ち、

それだけに逆に、(いつでも終われるという安心感から)

「ヒマであるなら、読んでもらえる可能性」が、他の二法よりも高まるようにも思える。

+ ただ、<引用導入><描写導入>の二法も、スタンダードであるということは、

「それが有用な部分も多々ある」ということでもある。

<いきなり本論>が最も無難かつ王道の書き出しであることは明らかなだが、

<引用導入><描写導入>の持つ“本論とは違うところで興味を引いている”という特徴を、理解し、効果的に用いることが出来るのであれば、それらの方法も無論、選択肢に入ってくる。

+ 絶対にNGなのが、“依頼を受けたことを自慢する”タイプの書き出し。

(例文):「不機嫌亭デザインズさんから、広告文の執筆依頼を受けた。

“デザインを広告する”という執筆テーマは、非常に興味深い。

ご紹介が遅れたが、不機嫌亭デザインズさんというのは 先日開始されたばかりの(後略)」

→ この書き出しは“読み手”にも“依頼主”にも なんらのメリットをあたえず、
ただ、書き手の、

『“僕、お仕事を受けたんだよ！ 嬉しいよ！ すごいでしょ!!”という自意識のアピール』あるいは
『“本当はこんな広告したくないんだけどね。生活の為だから”という責任回避のアピール』の、
いずれかのみしか行い得ていない。

そのような無意味なアピールに費やす行数があるのなら、
“よりよく広告をするため”に使った方が、依頼主のためにも、読み手のためにも、
そして書き手自身のためにも、絶対に有用。(なんとすれば、この類の書き出しだと、次の依頼が来る確率
が下がるから)

>> 第十章を読んでの私見

+ 文書・文章が“最後まで読まれるように書くべき”であるということは、逆にいえば、
「文書の途中までで伝えたいことが全て伝わるのであれば、それ以降は“余計な文章”なので、削るべき」ということでもある。

+ <いきなり本論> が最も有用かつ無難である、という教えには完全同意。

<引用導入>は、ほっとんどうやったことがないけど、
“読み手さんとの、距離の近さをアピールするための、『共有してそうな知識からの引用』とかだと有用”
かなあ、と思えた。

例えば、“不機嫌亭ゲーム班製作日誌のコア・読者さんだけを対象にした文章の書き出し”として。

「『絶対に、曲げない。』 —— 焼肉万歳・すりわたただおの記す言葉は、尽きること無きブリーフ愛を真っ
直ぐ示す」・・・とかなら、非常にありなような気が。

+ <描写導入>は、“エロいシーンへの期待が高まっているとき” で
“実際、次にHシーンが開始される時” の導入として、最強の部類に入るかと。

そういうときに、

「SEXが開始された」、とか

<いきなり本論>導入するのは、多分(趣向にすぐく左右されるとはいえ)ソリッドすぎるかとも感じるし。

[十一日目:09/10/30]

<第十一章:具体的なことを>

+ 文章は、端的・具体的に書く方が、そうで無い場合に比して、読んでもらいやすい。

(例文):

「磁性体を塗布した円盤を高速回転させ磁気ヘッドを移動させることで情報を記録し読み出す補助記憶装置の一種が破断した場合、かつ、当該する補助記憶装置の有する記憶情報を別媒体へ複製していない場合においては、ゲーム開発への深刻な障害を生じやすい」

「バックアップを取ってないと、ハードディスクがクラッシュしたとき非常にマズイ事態になりがちです」

→上記二例は、同内容のことを書いている。より端的な後者の方が、端的ではない前者と比して、圧倒的に読みやすい。

+ 「数字」は、非常に強い具体性を出すので、引き込む力を強く持つ。

(例文): 「錬電術師第一章 gate_wayは、初めての夏コミで、そこそこの数を売り上げることが出来た。しかし進行豹は、山のように初回在庫を用意していた。・・・帰りの荷物は重かった」

「錬電術師第一章 gate_wayは、初めての夏コミで110本の売り上げを達成した。しかし進行豹が用意していた初回在庫は300本!・・・帰りの荷物は重かった」

+ 「具体性」を冒頭に持ってくると、そこから続く文章は、
“読んでもらいやすくなる”だけでなく “より強い説得力を持つ”ことが出来るようになる。

→ 上記2例、それぞれの、「・・・帰りの荷物は重かった」 以下に、
『イベントへの持ち込み数をどうするか?・・・同人ソフト開発者には、常に付きまとう難問である。』
と続けた場合の説得力・引き込み力は、どちらが高いかは明白。

+ 「数字」、「具体例」を示すということは、即ち“事実を示すということ。
事実を示すためには「取材・調査」が必須。

+ また、“「数字」「具体例」で示し得る事実” を、“感覚的に書いてしまう”という行為は、表現をあいまいにするだけでなく、“その文章が存在する意味そのもの”を あいまいにさえしてしまう。

→“知らないこと”“調べてないこと”を無理に書こうとすると、どうしても描写は「あいまい・感覚的」になりやすい。

例えば、私が “今日の石材業界”について書こうとした場合。

何の事前調査も無しでは、

「不況の波は、多分石材業界をも襲っているのではなかろうか」——としか書きようが無い（し、そんな文章は“実質何も言っていない”ので、書く意味すら無い）。

が、例えば『年度別の売り上げと純利益の推移』のデータを調べ、それを文章で示せば、“具体的で読みやすく” かつ “意味を持つ”文章になる。

+文章に「意味」を与えるのは、つまり「描写」であり「具体性」。

→ 虫を徹底的に観察・描写し尽くしたからこそ、「ファーブル昆虫記」には極めて大きな意味がある。

+ 「具体的に」「端的に」書けるということは、逆から言えば、

“そう書くことを可能とするだけの取材量を有している” = “対象に深く切り込んでいる”ということである。

そうすると、そこには “何を書きたいのかという意図”が、くつきりと浮かび上がって来る。

「あいまいに」「感情的に」しか書けないということは、“その事象の表面を撫ぜることしか出来ていない”ということでもある。

新聞記事やルポにおいてだけでなく、小説などにおいても同様のことが言える。

(例文):

「ザワザワとして、どうにも不安な場所だった」 (感覚的な修飾のみ)

「その場所に踏み込んだ瞬間、ザっ! と暗がりに居た小虫たちが逃げ去った」 (事実の描写)

「何も無い……し、誰もいない。のに—— そこに居るだけで 僕の背中には じくじくと、とめどない汗がにじみ出てくる」 (事実の描写)

という三例。

「臨場感」、「得体の知れない不安感」……いずれを強調したいにせよ、

“具体的事実の描写”は、“感覚的な修飾のみ”の場合より、はっきりとその“意図”を示している。

+『思想や人生観は、常に細部の末端の現象と結びついたものでなければ、その人生観には生命が無い。』 (『小説の書き方』/野間宏、所載の 伊藤整の文章)

>> 第十一章を読んでの私見

+「説明より、描写」ということ。

+そして「描写よりデータ」ということ。

+しかし、“調べたことを、まるまる全部書く”と、“端的さを欠く”ことにもなってしまう。

ので、『具体的かつ端的に』という心がけは、素晴らしく有用であると感じる。

+感情的な描写、情緒表現は、「時々使うからこそメリハリがでる」ものであるとも読んでいて思った。

データで示し得ることは、当然に描写もできるし、情緒的にも表現できるが、

“情緒的に表現しか出来ないもの”を、データで示すことは無理。(でなければ、きわめて“無粋”)

よって、“データで示せるものはデータで”“描写できるものは描写し”。

“そのどちらでも、絶対に示せない”場合にのみ「情緒表現」を行うと良いのではないかなあ、とも感じた。

…今後、自分で書きながら試行錯誤していきたい。

[十二日目:09/11/01]

<第十二章:原稿の長さや密度>

+印刷されることを前提にした文章には、“ページ数・行数”という物理的制約が宿命的に付きまとう。

その文章のために避けるあるいは裂いてもらえるページ数・行数の限界が、即ち“その印刷物内に書き得る原稿の長さ”の限界。

+「長すぎる」には、カット・リライト等の対処法があるが、「短すぎる」には、水増し以外の対処法は無い。

そして 水増しは、必ず読み手に見破られる。

+“書き得る原稿の長さの限界”のワク内での、最高の効果を得ようとするのであれば、

当然に 最高の密度をもった文章を書く必要が出てくる。

+“密度が高い”は、“たくさんの字数を詰め込んでいる”とは異なる。

“密度の高さ”は、“その文章内の情報が持つ(読み手のとつての)意味の濃さ”。

→ 1記事内に“5つの事柄”を書けるだけのワクを与えられたとする。

その“5つの事柄分のワク”内を、

100の候補の中から精選した“5つの事柄”を書くことにより埋めた場合と、

4つしか見つけられなかった候補を ただ水増しして埋めた場合とでは、

あきらかに前者の方が、“高い密度”を持つことが出来る確率を、圧倒的に向上させられる。

+“事柄の候補数”と、正の相関関係を持つのは“取材量”。

たくさんの正確な取材は、たくさんの“書くべき事柄の候補”を書き手に見つけ出させる。

+しかし、“取材量”を、“事柄の候補数”の確保だけに使っているのは、

“最高の密度”には到達できない。

+100の候補の中から、“伝えたいことを最も伝えるであろう1つの事柄”だけを厳選し、

徹底的な取材を重ね、その “たったひとつの事柄内”に、

<“5つの事柄を書けるワク内”を埋めてなおあまりあるほどの、意味的に適切なディテール>を見つけ出し、それをきちんと、ワク内に修めて描写し文章化することが出来たのならば。

書かれた文章は、

“5つの事柄の羅列によりワクを埋めた文章” よりも、さらに高い“密度”を持てるようになる(確率が上がる)。

+ゆえに“密度”は、

“伝えたいことを真に伝える事柄を選びだし得るか” ならびに

“真に伝える事柄を、意味的に適切なディテール描写を 量的にも的確に伴わせて文章化できるか”

—— の2点によって、決定づけられると言える。

>> 第十二章を読んだ私の私見

+“密度で勝負”は、物語においても同じこと。

“事柄”とは、すなわち“イベント”。

「どれだけ魅力的なイベント候補をプロットレベルで用意し」

「その中から、適切な量・意味のイベントを厳選して配置し」

「配置したイベントを、どれだけ豊かなディテール描写を伴って文書化できるか」

——は、“物語密度”を、そのまま左右するように思う。

+ そして、“ディテールを裏打ちするのは、取材量”であることにも、完全同意。

+ それはつまり、

『カットすべき部分は、正確な取材を行うことにより、自動的に決まって来る』

ということの意味するようにも思うので。

最終章でもある <第十三章:取材の方法>の内容への期待も、非常に高まってきた。

[十三日目:09/11/02]

<第十三章:取材の方法>

+ 取材力は、説得力を産む唯一の根源。

取材という裏付けなしに書かれた文章は、

どれほどの文章力を基にしているとしても結局“筆先だけで書かれた”ものになってしまう。

「読み物としての面白さ」を基準とした場合、往々にして【取材力は、文章力に勝る】。

+取材において、極めて重要な点は二点。

そのうちの一つは、「誠意をもって、取材相手に対すること」。

【誠意は、まずは態度であり、次いで事実をもって証明することである】。

+態度は、即ち“謙虚さ”。

「相手を見せてもらう」「相手に話を聞かせてもらう」

ことが取材であるのだから、相手に対し 謙虚である(=相手の言動を虚心に受け取る)ことが大切。

+相手の“正”・“非”によって、謙虚さを失うようなことがあってはならない。

少なくとも、判断の資料としての取材段階までにおいては、その取材は、

“正”・“非”を見極める材料を入手するという行為としての「取材」であるのだから、

あらかじめ「取材相手の“正”・“非”を決めておく」という態度は不誠実に当たる。

+態度が立派でも、「その態度が結果を伴わないのであれば、結果は“裏切り=最悪の不誠実”となる」。

→取材をしたあと、礼状の一つも出さない。書いた記事の一本も送らない。

・・・などなどの非礼を犯すのであれば、取材時に見せた誠意は“偽物”になってしまう。

「誠意とは、事実を持って証明すること」とは、このこと。

→例え、(取材結果としての記事が)取材相手を非難し、糾弾をするものとなったとしても、
「事実に誤りがあれば、ご指摘ください」という一文を記事にそえて送ることが、誠意。

+ 取材において、極めて重要な第二の点は、【結果の確認】。(取材内容の事実確認)

+ 結果の確認には、第一次確認から第三次確認までがある。

(例):

<マンガ家が、書いたマンガの中に、極端な差別表現にあたる台詞があり 雑誌回収騒ぎが起きた>

マンガ家は

『その差別表現は編集者のアイデアであり、打ち合わせ段階で提案されたが拒否した。にもかかわらず、原稿送付後に編集者が勝手に挿入した』と主張し、

編集者は、

『いや 打ち合わせ段階で、作家側から出て来たアイデアである、故に尊重した』と主張するという、
<事件>が発生したものとして考えてみる。

取材者は、まずその第一歩として、「当事者のどちらかに、詳細に話を聞く」ことから取材を始める。

仮に、マンガ家から話を聞くとすると、

「初期のネームには、これこのようにそんな台詞は書かれていない」 とか

「打ち合わせは新宿駅そばのルノアールで行った」 とか、

「『あの編集者には、勝手に台詞を挿入する癖がある』と、たくさんのマンガ家仲間が知っている」

・・・などの証言を、そこから得られるものである。

それらの証言は、「そのまま書くと、編集者に不利に働く」ものであるので、そこに“誤まった事実”が含まれていた場合には、大問題になる。

故に、それらの点について、編集者側からも取材してみる。これが【第一次確認】。

この取材を拒否された場合は「この点について、編集者側は取材を拒否した」との事実を書けばよい。

第一次確認をとると、ほとんどの場合、「食い違い」が出てくる。

例えば、編集者が ——

「あなたが見せられた“初期のネーム”は、事件発生後に台詞を書き直されたものだ」

「私に改ざん癖などない。むしろ、『あのマンガ家はウソばかりつく』と、他の先生方からも悪評が立っている」 —— と、主張したりする。

この食い違いについて今度は、「編集者さんは こう言ってますが・・・」 と、マンガ家に再確認をする。
これが、【第二次確認】である。

第二次確認後も、マンガ家側の主張が変化しない部分については、周辺のダメ押し取材を行う。

「初期のネームのコピーや、メール、FAXの送信履歴が残っていないか」

「打ち合わせ場所であったルノアールで、誰か打ち合わせの様子を目撃していたものはないか」

「周囲のマンガ家たちに、(事件発覚前に)本当にそのような発言があったのか」

などについての調査がこれにあたる。

それらによっても、マンガ家側の主張が揺るがぬ場合には、(揺らいだ場合には、マンガ家側を再取材) 編集者側に、「これこれこういうことになっていますが」と、再度の確認をする。これが【第三次確認】。
この結果次第で――

「編集者がマンガ家側の主張を認めざるを得なくなった」 →その事実を記事化。

「編集者が、ノーコメントに転じた」

→マンガ家の主張、ノーコメントに転じた事実、周辺取材によって得た資料とを含めて、記事化。

「編集者とマンガ家の意見がなお食い違っている」 →相手方の主張(食い違い点)を含め、記事化。

――とやれば、「説得力をもった記事」が書かれる確率は、(確認の浅い場合と比して)飛躍的に高まる。

→「100の事柄のうち、99が正しく、1だけが誤まっている記事を書いてしまった場合、

反動側は、“1の誤り”だけを取り上げ 拡大指摘し、『この記事には信ぴょう性が無い』と主張する」。

故に、【結果の確認】は、取材にとって極めて重要。

>> 第十三章を読んでの私見

+物語作成における“取材”とは、ここで論じられているとおりの取材と、

“いわゆる、資料読み”の二種類が含まれるように思う。

+そのどちらにあたって、【誠実に、虚心に取材対象に向かう】ことは、やはり大切だと感じた。

資料読み一つにしても、先入観をもってしまうと、「自分に不都合な部分をスルーしがち」になってしまう。

そしてそれでは、「資料を読みこむ意味が無い」。

+ また、【結果の確認】の重要性に関する論述は、非常に勉強になった。

「1の誤りは拡大指摘され、正しい99を揺るがす」という現象は、
“物語の魅力”に対しても、往々にして発生するものであると思う。

“第三者チェック”や“リライト”が、つまり、「物語作成における【結果の確認】作業」であるのだと思う。

+ 故に、【結果の確認】を行えないようなスケジュールで物語作成を行うことは、厳に戒むべきである。

[最終日:09/11/03]

<付1:メモから原稿まで>

+取材メモには大学ノートが良い。（大きいので沢山書ける、大きいので失くしにくい、あとで合本に製本しやすい、通しページ数がつけやすい）

+取材メモには2色ボールペンが良い。（整理しながらメモを取れる）

+取材の前には「取材対象を、ある程度絞り込む」「取材目的を明確にしておく」ことが必要。
対象と目的が明確でなくては、メモを取るべき事項もあいまいになってしまう。（無限にメモはとれない）

+取材がある程度進んだら、取材した事項を「目次を作って整理してみる」。
すると不足部分が明確になるので、その部分をさらに取材して補う。
これが終了すると、メモの段階は完了。

+メモが大量になった場合（≡長い原稿を書く場合）には、
先ほど立てた目次の大項目を「1項目＝1枚のカード」に書き、並べ替えることにより、
“解かりやすい構成”を考えることが有効。

+「原稿の書き方」のルールで、原稿用紙以外に書くときにも役に立ちそうなのは以下の項目。

1:固有名詞は絶対に間違えない

2:文章の書き出しや、改行の後には一字下げをすること。

（“文章の途中で物理的制約による改行がなされたのか、意識的な改行がなされたのかを、一字下げは明確化してくれる）

<付2:日本語と方言の復権のために>

+「(英語>日本語)、(標準語>方言)”的に、
言語に“格付け”をする意識があることに対する問題提起」——をする一文。

<コメント>

+(<コメント>は 梅棹忠夫氏によって書かれた、「日本語の作文技術」に対するコメント。
以下、その要約

-
- 1:「修飾の順序を決定するときに、“重要度”を明確に判断できるケースばかりではない」。
 - 2:「重要度順の修飾順決定が誤解を招くケースも存在する」。

その例として 『初夏の緑がもえる夕日に照り映えた』 という一文があげられる。

同文は、「日本語の作文技術」で学習する文法、
「関連性の強い、“修飾語”“被修飾語”セットを出来るだけ近づける」の上で、正しい。
しかし、で、あるにも関わらず
「“夕日”を修飾する“もえる” が “初夏のみどり”が“もえる”を修飾している」のだとの、
一瞬の戸惑いを産みやすいことも事実。

より解かりやすい修飾順は 『もえる夕日に初夏の緑が照り映えた』 となる。

+ このように、“意味的な慣用”への配慮も、わかりやすさを追求するためにとっても重要なことなので、
【文法は絶対則ではなく、あくまでより良い作文のための補助手段】であることを忘れてはならない。

+また、同様に “順節の<が>も、全面的に否定すべきものではない”。

——以上、要約。

>> 付1、付2、コメント、を読んでの私見

+ 付1は、そのまま“資料読み(取材)”→(物語における)“プロット作成”の手順としても100%有用かと感じた。

+ 付2。

「提起された問題に対し――

“その問題は実際に存在するとは感じるけれど、そこに自分が何をできるのかが解からないなあ”
――と感じた」のが、今の私の精一杯でした。

+ 文法を解説した本の最後の最後に、識者の言葉として

「文法はあくまでその補助的手段にすぎない。」 との見解を紹介するバランス感覚は素晴らしいし、紹介された内容にも完全同意。

その意識を忘れると

「ルールを守っている文章＝読みやすい文章」であるとの甘えが生まれやすいように思う。

『ルールを守ったようが読みやすくなり、意味を伝えやすくなるなら、ルールは破るべき』 かと。

<<全体を通じての私見・感想>>

+こんなに一生懸命 本を読んだのは初めてなので、疲れた。

+「日本語」は、普段 とても簡単に使っているのに、“日本語を上手く使うための技術”に関して、今までの私は軽視しがちだったように思う。

しかし、本書を精読し、レジュメ化してみて、

「小さな技術を丁寧に積み上げることにより、結果として素晴らしい改善が得られる」のだと感じた。

+このレジュメ内の日本語が、学習したルールを守り あるいは 破ることにより、

「結果として読みやすい」ものになっていけば、本当に嬉しい。

(本文章の文責は全て 不機嫌亭ゲーム班 進行豹にあります。

御意見、ご苦情、ご要望などにつきましては、

E-mailアドレス: hexaquarker△gmail.com (←△を@に変えてください)

までお寄せいただけますよう、謹んでお願い申し上げます)